

2021 年度春学期 全員履修科目 「日本語表現」成果と課題

梅村 修

Achievements and Issues of a Compulsory Academic Writing Course
for First-Year Students :
A Case Study of JAPANESE EXPRESSION at Otemon Gakuin University

Osamu UMEMURA

【キーワード】日本語表現、質の保証、全員履修化、「書く」筋トレ、論作文課題、
振り返りメール、基本的な文章作法、ピア・ラーニング、
談話標識 (= Discourse Marker)、追大日本語表現力検定

1. 「日本語表現」のコース概要

2021 年度春学期、「日本語表現」は、「思考し、表現する学生を育てる～『書く力』のトレーニング」を授業テーマに掲げ、すべての新入生を対象に、30 名程度の少人数クラスが計 68 教室、開講された。シラバスに掲げられた授業の目的は、「大学での学びの基礎となり、同時に、生涯にわたって自己形成の基盤となる日本語力、中でも『書く力』を向上させ、学生一人ひとりが、思考し表現する喜び、理解と共感を得る喜び、人や組織に変化をもたらし、自分自身も成長する喜びを感じることを目的とする」とうたわれている。

クラス編成は当初、学部横断を希望した。同質な集団の中ではピア・ラーニングがうまく機能しないと考えたからだ。しかし、教務課との折り合いがつかず、やむなく学部縦割りクラスで編成されることになった。その内訳は、経済学部 14 クラス（月曜 1・2 限）、経営学部 16 クラス（火曜 2・3 限）、地域創造学部 8 クラス（火曜 1 限）、社会学部 12 クラス（月曜 3 限および木曜 2 限）、心理学部 7 クラス（月曜 4 限）、国際教養学科 5 クラス（木曜 4 限）、国際日本学科 6 クラス（木曜 3 限）である。担当教員は、専任教員 2 名、非常勤講師 3 名、外部委託講師 15 名の合計 20 名の布陣であった。そのうち、外部委託講師¹は 68 クラス中 55 クラスを担当した（専任教員は 5 クラ

1 外部委託講師・・・株式会社イング派遣の外部委託講師。株式会社イングは 1969 年に創業し、「人材育成」「パートナー支援」「地域貢献」を目標に掲げ、関西を中心に事業を展開。小中学生向けの学習支援事業では学習指導塾を 42 ヶ所、大学受験を目指す高校生向けには映像授業を行う教室を 9 ヶ所運営する。大学生のキャリア支援については 50 以上の学校法人にて年間 250 以上の講座を開講し、社会人向けのキャリア支援事業では職業訓練校を委託開講している。株式会社学研ホールディングスグループ企業。

担当クラス数 内訳

外部委託	55
非常勤講師A	4
非常勤講師B	2
非常勤講師C	2
東田 充司	2
増地 ひとみ	3
合 計	68

ス、非常勤講師は8クラス担当)。

このように大きく外部委託講師に依存した科目であるので、授業の「質の保証」がなにより大事であった。「業者丸投げ」のそりりだけはぜったいに避けなければならなかった。そこで、筆者は(授業こそ担当しなかったが)シラバスの作成から、全13回の授業のパワーポイント教材の作成、事前課題・事前動画の作成、外部委託講師の監督、学期末

の成績評価まで、コース全般の企画・立案・運営にかかわった。外部委託講師をはじめ授業担当教員には、教材の取扱い等、自己裁量の余地は認めたが、シラバスに記された授業計画から大きく逸脱するような内容・方法の変更は厳に慎んでいただいた。また、後述する「日本語表現」が掲げる4つの方針、すなわち、(1)日本語の4技能のうち「書くこと」に軸足を置いた指導に心がけること、(2)談話標識(Discourse Marker)に沿った論理的で明晰な文章を指導すること、(3)「原稿用紙」に向かう前に、学生同士で教え合い学び合う教室活動を入れ込むこと、(4)アカデミック・ライティングの土台になる基本的な文章作法の習得を目指すので、いわゆる「レポートの書き方」「序論・本論・結論」のようなトピックは扱わないこと、これら4方針を遵守していただくようお願いした。

「日本語表現」の到達目標と評価方法については、次ページの表1を参照されたい。

表1 「日本語表現」の到達目標と評価方法

到達目標	評価方法 1 授業時間内の試験	評価方法 2 授業時間内の成果物	評価方法 4 授業時間外の成果物
1. 800字の日本語の文章が、ディスコース・マーカー(談話標識)を使って、30分以内で書ける。		40 計8回×5点の課題作文	10 ビブリオ・バトルのシナリオ、および自撮り動画
2. 「追大 日本語表現力検定」を受検し、最低基準(DM初級段階)をクリアすることができる。	20 追大日本語表現力検定		
3. 適切な敬語表現を使って、目上の人にメールが書ける。			20 授業後に担当教員に送信するメール
4. 談話を聞き、ノートを取り、内容をまとめたり、発表したりできる。		10 ノートのとり方	
小計	20	50	30

2. 「日本語表現」の全員履修化の背景

春学期の成果を紹介するまえに、「日本語表現」がこのような大掛かりな全員履修科目になった背景について述べておきたい。

基盤教育科目のカリキュラム再編ともなっていて、2021年度から、「日本語表現」は初年次春学期

の全員履修科目に“昇格”した。それ以前は、初年次科目の中の一科目にすぎなかった。

“昇格”の背景には、初年次生の「書く力」の課題があった。

近年、本学学生の入学時点の偏差値は上向き傾向にある。いわゆる「分厚い中間層」が目減りして、二極分化が進み、学力上位層がやや膨らんだかっこうだ。その結果、いわゆる「読み書きそろばん」において、堅実な基礎学力を身につけている学生がちらほら見られるようになった。

しかし、2021年の春先に実施したSPI模試の結果をみると、50点満点中20点以下の学生の比率は、言語系が49.8%、非言語系では実に66.6%を占めている。前年度（2020年度）が、言語系が47.4%、非言語系が64.0%だから、全体ではむしろ低下傾向にある。総じて、本学の初年次生は、数的処理能力、日本語のリテラシー等の基礎学力が低い、といわなければならない。

なかでも、日本語の言語技術（Language arts²）の訓練、とりわけ論理的で明晰な日本語を書くトレーニングを十分受けていない初年次生がとて多い。「日本語表現」の履修生にヒアリングすると、高校までの国語の時間は、もっぱら受験に直結した語彙や読解や文学鑑賞に費やされており、作文を書いて添削指導を受けたことがある、と答える学生は皆無に等しい。彼らが日常的に「書く」日本語は、作文でも小論文でもなく、LINEやTwitterでの「私語」や「つぶやき」がほとんどで、筋道立てて説明するとか、「事実」と「意見」を分けて論述するとかといった経験をあまり積んでいない。もちろん、この印象は定量的な統計結果に基づくものではないが、大学入学共通テストでの記述問題の「先送り」や、高校生のスマホ依存を目の当たりにすると、まんざら見当はずれな見解ではないと考える。

こうした入学生の日本語の読み書き能力の未熟さを、専門学部での学修に先立つ初年次段階でなんとか補う必要がある。そこで、2019年度に策定された第三期中期経営戦略では、CSF 14「初年次教育におけるソフトスキル確立プログラムの開発」が掲げられ、入学生の現状を把握したうえで、卒業までに獲得すべき「ソフトスキル」を明確化し、各学部と協働で、「初年次教育科目の必修化・全員履修等を検討し、体制を整備する」ことが謳われるにいたった。

3. 「日本語表現」授業の基本方針

こうした全員履修化の背景のもと、「日本語表現」の授業では、日本語の「書く力」のトレーニングに力を入れた。学生には、「書く」筋トレをスローガンに、8回の論作文課題と、毎授業ごとの振り返りメールを課した。教師は“赤ペン先生”となり、徹底的な添削指導を繰り返した。

また、論理的で明晰な文章が書けるような指導に心がけた。方法論として取り入れたのが、談話標識（Discourse Marker）の獲得、すなわち、文章の型の習得である。履修生には、初級から上級までの談話標識のリスト（表2）を示し、合格最低基準（初級）をクリアすることを単位修得のめやすとした。

2 言語技術（Language arts）・・・欧米を中心に、南米、アジア（英語圏）、中近東、アフリカなど、世界の多くの国々の初等中等教育でトレーニングされている母語に関する4技能。いわゆる「国語」とは異なり、大量の文章を読み取り、考え、議論した結果を適切な型を用いて表現できる総合的な技術を指す。

表 2 談話標識 (Discourse Marker) の例

	文の機能	到達目標	代表的なDiscourse Marker	初級	中級	上級
1	問題提起	ある課題にたいして、自ら問を立てることができる	～だろうか。			○
2	主張・結論の提示	問に対して、自らの主張・結論を端的に述べることができる	結論からいうと～と考える	○	○	○
3	理由・根拠の提示 背景の提示	自らの主張・結論に対して、そう考える理由・根拠・背景を、3つ、述べる ことができる	理由は3つある。まず～。つぎに～。最後に～。そう考える背景にあるのは……	○	○	○
4	引用の提示	理由・根拠の裏付けとなる、客観的なデータや文献を正しく引用して、根拠を示すことができる	……によると～ということだ。 ……によれば～とのことだ。		○	○
5	具体的な事例の提示	具体的な事例や自分の体験などをあげることができる	具体的に示すと～ たとえば～	○	○	○
6	他者の主張・結論への目配りと乗り越え	想定される反対意見や一般論、先行研究などを紹介し、反駁したり、不備な点を指摘したりすることができる	確かに～。しかし～……。なるほど～だが……。～なのは確かだ。ところが……という見方がある。それに対して、……というのは事実だ。一方で、		○	○
7	原点への立ち返り	問題提起にたいして、原点に立ち返って論議を展開することができる	そもそも～。しかるに～。			○
8	未来の想起 必然性の提示	現在のある事象や状況から、将来、想定できることを述べるができる	このままでいくと～。その結果……だろう。			○
9	総括、要点の提示	ここまで述べ来った内容を短く要約することができる	ようするに、つまり、簡潔に言えば、		○	○
10	主張・結論の再提示	当初の主張・結論を繰り返し、再提示することができる	最後にもう一度言うと、	○	○	○

さらに、教室活動にピア・ラーニングを取り入れた。日本語を「書く力」の鍛錬を、個人の営為にとどめない。原稿用紙に向かう前に、クラスメートとの情報交換・意見交換を行い、書く内容を豊かにし、アウトラインを作成したうえでワープロに向かわせた。いわゆる、「主体的で対話的な深い学び」を、論作文課題にも取り入れたわけである。

最後に、アカデミック・ライティングの土台となる基本的な文章作法の習得を目指した。先にも書いたように、学生たちは高校までに論理的で筋道だった文章を書く訓練をほとんど経てきていない。読書体験も乏しい。そこで、まず、文体の統一、「事実」と「意見」の書き分け、パラグラフ・ライティングなど、初等中等段階で身につけているべき基本的な知識・スキルを確認するところから始めた。そのうえで、ノートの取り方、引用の方法など、大学での学修に欠かせない汎用的な知識・スキルを導入した(表3)。

表3 『日本語表現』の論作文のテーマと学習項目

	論作文のテーマ	学習項目
第1回		プレテスト
第2回		待遇表現、公的なメールの書き方
第3回	①結婚するなら、恋愛結婚か、それとも見合い結婚か	談話標識（ディスコース・マーカー）
第4回	②未就学児にYouTube動画を見せることに、賛成か、反対か	誤字・脱字・変換ミス、改行、読点、文体、機能語・内容語など
第5回	③読書の功罪	「係り」と「受け」の不对応
第6回	④新型コロナウイルス	羅列の不整合
第7回		ノートの取り方
第8回	⑤禁酒のすすめ	敷衍する力 その1 説得
第9回	⑥佐藤雅彦『プチ哲学』より 中身当てクイズ	敷衍する力 その2 説明
第10回	⑦少女はなぜ微笑んでいるのだろうか	「事実文」と「意見文」を書き分けよう
第11回	⑧定年を70歳まで延ばすべきである。賛成か、反対か	事実と根拠～引用の方法
第12回		ポストテスト
第13回		ビブリオバトル

以上、4つの方針（「書く」こと中心、文章の型の習得、ピア・ラーニング、アカデミック・ライティング以前の基本的な文章作法の確認）に加えて、近年、やかましく言われている、「学習成果の可視化」にも配慮した。「日本語表現」の授業では、「追大 日本語表現力検定」と名付けて、「高等学校の制服を廃止すべき、という意見に賛成か、反対か」というテーマで、初回にプレテスト、12回目にポストテストを実施した。

4. 授業の進め方

ここまで、「日本語表現」のコース概要、全員履修化の背景、授業の基本方針について述べてきた。ここで、1回の授業の進め方について簡単に触れておく。

授業は105分の教室活動の前後に、表4のように、事前課題と事後課題を配置する（ともに授業時間外課題）。

表4 事前課題・105分の教室活動・事後課題

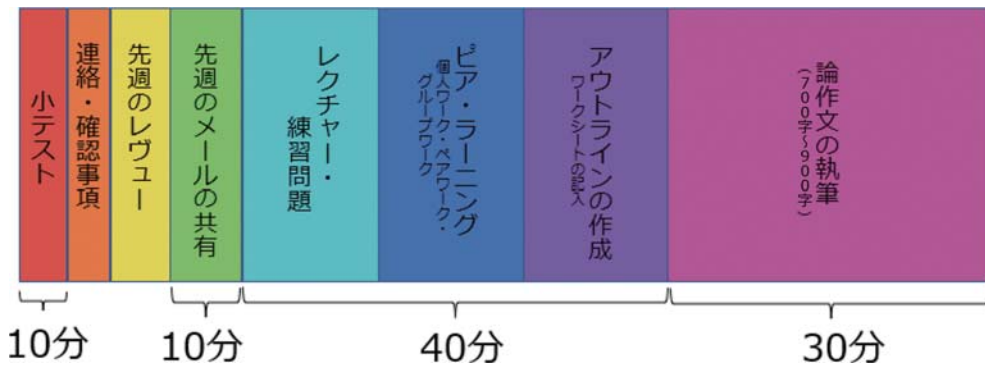
事前課題 (授業時間外課題)	105分の教室活動	事後課題 (授業時間外課題)
1. 事前課題(動画)を視聴して、授業冒頭の小テストに備える。 小テストを受検しない場合、欠席扱い。		1. 授業中に書けなかった課題作文を執筆し、メール添付で送る。 2. 毎回の授業での学びや気づきについて、担当教員にメールを書く。

事前課題は、次週の授業で扱う講義の内容を 15 分から 25 分程度にまとめた音声付き YouTube 動画（限定公開）である。履修生はこの音声付き動画を自宅で事前に視聴し、授業冒頭で実施する小テストに備える。この小テストは出席要件なので、受検しないと欠席扱いになる。小テストを授業冒頭で実施することで、遅刻の防止と予習の習慣化を目指した。

一方、事後課題は、2 つある。一つは、授業内で書ききれなかった論作文課題を完成させて、所定の期日までに担当教員に送信することである。履修生には、毎回の授業で、談話標識（Discourse Marker）に沿って、30 分以内に 700 字以上 900 字以内の論作文が課される。原稿用紙に向かうまえに、個人作業でワークシートを作成し、ピア・ラーニングで書く内容を膨らませ、アウトラインにまとめているが、なかなか 30 分で完成する学生は少ない。自然と授業内課題は授業時間外課題になってしまう。もう一つの事後課題は、授業での学びや気づきについて、担当教員に、公式な書式に沿った振り返りメールを書くことである。シラバスの到達目標の 3 つ目に、「適切な敬語表現を使って、目上の人にメールが書ける」とある。この目標を達成するために、履修生は 13 回の授業が終わるごとに、WebClass（LMS：学習管理システム）のメッセージ機能を使ってメールを書くトレーニングをする。優秀なメールは次週の授業中に共有した。

つぎに、1 回の授業のメニューについて述べる。105 分の教室活動の時間配分は、おおよそ表 5 のような内訳になっている。

表 5 105 分の教室活動の時間配分（目安）



先述のように、冒頭の 10 分間で事前課題の確認のための小テストを実施し、答え合わせをしてから諸連絡やメールの共有を行う。表 3 に掲げたように、毎回、論作文のテーマと学習項目が決まっており、学習項目のレクチャーと練習問題のあとに、論作文課題の執筆のためのピア・ラーニングとアウトラインの作成がある。105 分の授業が単調にならないように、講義を聴いている時間帯と、ペンをとって言葉を紡ぎだしている時間と、仲間と話し合っている時間を交互に配置している。

5. 「日本語表現」の成果

68 クラスのうち、8 割以上を外部講師に委託するからには、費用対効果が厳しく求められる。

「日本語表現」では、68 クラスすべての出席率と成績評価に加えて、「追大 日本語表現力検定」による談話標識（Discourse Marker）の定着率の調査、グーグルフォームを活用した期末アンケート、「『日本語表現』とこれからの私」と題する最終授業での作文課題、そして全学授業アンケート、と多方面からアセスメントを実施し、シラバスに掲げた授業の目的が達成できたかどうか、を検証した。

また、「日本語表現」はすべての新入生が等しく履修する科目なので、学部教育とも密接にかかわりがある。基盤教育科目のカリキュラム再編により、2021 年度から「新入生演習」が基盤教育科目から学部科目に移管された。この「新入生演習」の後継科目では、ライティングやリーディングの基本スキル、ノート・テイキングなど、日本語の読み書きにかかわる内容も教えられている。「日本語表現」では、この学部の「新入生演習」後継科目と緊密に連携し、新入生の日本語リテラシーを「漏れなくダブリなく」伸ばしていきたいと考えた。そこで、2021 年 7 月中旬から下旬にかけて、「新入生演習」の後継科目の担当教員と、懇談の場を 7 回もった。懇談の目的は、「日本語表現」の詳しい授業内容を伝えるとともに、「新入生演習」の後継科目における日本語リテラシー教育の実情を、差し支えない範囲で教えてもらうことだった。懇談の結果、来年度以降の「日本語表現」の授業で重点的に取り扱ったらい内容、割愛してもよい内容、新たに設定したほうがよい内容など、数々の課題が浮かび上がった。

以下に、こうした 68 クラスすべての（1）「出席率と成績評価」に加えて、（2）「『追大 日本語表現力検定』による談話標識の定着率の調査結果」、（3）「グーグルフォームを活用した期末アンケートの結果」から、全員履修科目「日本語表現」の成果を報告する。

また、2021 年度から新たに全員履修科目として開講され、外部委託業者とともに運営されている 3 つの科目～日本語表現、数的処理入門、追手門アイデンティティ～と新規科目「総合英語」（必修科目）について、春学期の（4）「全学授業アンケートの結果」が伊藤文雄教授（基盤教育機構副機構長 兼 教務部長）から届いている。本稿執筆時（2021 年 11 月 30 日現在）では、「数的処理入門」「追手門アイデンティティ」「総合英語」について、通年での調査結果が出そろっていないため、本稿では伊藤教授からいただいた図表を掲載するにとどめ、詳しい分析は後日を期したいと思う。

（1）出席率と成績評価

以下に、2021 年度春学期の「日本語表現」全 68 クラスの出席率と成績評価を学部ごとに集計した。

【経済学部】

曜日	クラス	人数	出席				成績					
			出席回数	欠席回数	出席母数	出席率	S	A	B	C	D	E
月1	A	30	363	23	390	93.1%	17	7	3	2	1	0
	B	30	362	28	390	92.8%	3	10	8	8	0	1
	C	30	365	25	390	93.6%	2	0	11	11	6	0
	D	30	367	23	390	94.1%	0	7	12	7	4	0
	E	30	381	9	390	97.7%	5	14	6	5	0	0
	F	30	371	19	390	95.1%	3	15	7	4	1	0
	G	30	376	14	390	96.4%	4	11	7	5	3	0
月2	H	30	340	46	390	87.2%	13	5	3	5	4	0
	I	30	377	13	390	96.7%	3	7	10	5	5	0
	J	29	349	28	377	92.6%	2	11	7	7	2	0
	K	29	343	34	377	91.0%	3	15	4	6	1	0
	L	29	367	10	377	97.3%	5	14	8	1	1	0
	M	29	355	22	377	94.2%	6	7	8	4	4	0
	N	29	351	26	377	93.1%	4	13	8	2	2	0
経済		355	4342	269	4615	94.1%	50	119	91	62	33	0

【経営学部】

曜日	クラス	人数	出席				成績					
			出席回数	欠席回数	出席母数	出席率	S	A	B	C	D	E
火2	A	30	372	18	390	95.4%	8	12	6	3	1	0
	B	30	381	5	390	97.7%	15	8	3	3	1	0
	C	30	372	18	390	95.4%	8	10	5	7	0	0
	D	30	371	19	390	95.1%	3	8	9	7	3	0
	E	30	379	11	390	97.2%	1	12	6	4	7	0
	F	30	367	23	390	94.1%	5	9	7	6	3	0
	G	30	368	22	390	94.4%	2	18	7	0	3	0
	H	29	351	26	377	93.1%	5	10	8	2	4	0
火3	I	30	369	21	390	94.6%	9	8	4	3	6	0
	J	30	367	23	390	94.1%	8	18	3	0	1	0
	K	30	364	26	390	93.3%	5	8	7	5	5	0
	L	30	362	28	390	92.8%	2	6	8	8	5	1
	M	29	337	40	377	89.4%	1	11	6	5	6	0
	N	30	376	14	390	96.4%	4	14	8	4	0	0
	O	29	369	8	377	97.9%	4	13	9	3	0	0
	P	30	381	9	390	97.7%	1	2	15	10	2	0
経営		387	4761	270	5031	94.6%	50	137	97	57	45	1

【地域創造学部】

曜日	クラス	人数	出席				成績					
			出席回数	欠席回数	出席母数	出席率	S	A	B	C	D	E
火 1	A	30	378	12	390	96.9%	11	11	6	2	0	0
	B	29	369	8	377	97.9%	13	9	7	0	0	0
	C	29	373	4	377	98.9%	13	11	4	1	0	0
	D	28	357	7	364	98.1%	0	6	11	7	4	0
	E	29	362	15	377	96.0%	3	12	11	3	0	0
	F	29	366	11	377	97.1%	0	16	11	1	1	0
	G	29	357	20	377	94.7%	4	13	8	1	3	0
	H	29	368	9	377	97.6%	3	11	10	2	3	0
地域創造		144	1810	62	1872	96.7%	10	58	51	14	11	0

【社会学部】

曜日	クラス	人数	出席				成績					
			出席回数	欠席回数	出席母数	出席率	S	A	B	C	D	E
月 3	A	28	360	4	364	98.9%	1	15	8	4	0	0
	B	28	353	11	364	97.0%	3	9	8	4	4	0
	C	28	346	18	364	95.1%	2	11	10	4	1	0
	D	27	335	16	351	95.4%	2	17	4	4	0	0
	E	27	344	7	351	98.0%	4	15	6	2	0	0
	F	27	345	6	351	98.3%	7	16	2	1	1	0
	G	27	344	7	351	98.0%	6	14	4	3	0	0
社会		192	2427	69	2496	97.2%	25	97	42	22	6	0
木 2	H	30	356	34	390	91.3%	11	10	4	2	1	2
	I	26	328	10	338	97.0%	4	6	9	6	1	0
	J	27	343	8	351	97.7%	0	5	16	5	1	0
	K	26	331	7	338	97.9%	3	15	5	3	0	0
	L	27	330	21	351	94.0%	4	12	3	3	5	0
スポーツ文化		136	1688	80	1768	95.5%	22	48	37	19	8	2

【心理学部】

曜日	クラス	人数	出席				成績					
			出席回数	欠席回数	出席母数	出席率	S	A	B	C	D	E
月 4	B	28	360	4	364	98.9%	4	13	9	1	1	0
	C	28	361	3	364	99.2%	10	18	0	0	0	0
	D	29	370	7	377	98.1%	5	17	5	2	0	0
	E	29	366	11	377	97.1%	7	16	3	1	2	0
	F	29	357	20	377	94.7%	5	15	5	2	2	0
	G	29	373	4	377	98.9%	10	14	1	2	2	0
	H	27	344	7	351	98.0%	2	14	9	2	0	0
心理		199	2531	56	2587	97.8%	43	107	32	10	7	0

【国際教養学部】

曜日	クラス	人数	出席				成績					
			出席回数	欠席回数	出席母数	出席率	S	A	B	C	D	E
木 3	A	32	396	20	416	95.2%	7	14	5	6	0	0
	B	32	409	7	416	98.3%	13	10	5	4	0	0
	C	32	399	17	416	95.9%	9	3	13	5	2	0
	D	32	403	13	416	96.9%	0	1	21	9	1	0
	E	32	391	25	416	94.0%	4	20	5	2	0	1
	F	32	389	27	416	93.5%	9	10	6	4	3	0
木 4	A	29	339	38	377	89.9%	3	11	8	3	4	0
	B	29	371	6	377	98.4%	2	12	10	2	3	0
	C	29	352	25	377	93.4%	4	12	7	4	2	0
	D	29	357	20	377	94.7%	0	3	17	6	3	0
	E	29	361	16	377	95.8%	3	9	10	3	4	0
国際教養		305	4167	194	4381	95.1%	47	91	102	42	22	1

以上、「日本語表現」全 68 クラスの出席率と成績評価を学部ごとに集計した。履修者総数は 1718 名、総出席率は 95.5% という高い割合だった。成績評価の内訳は、S 評価者が 247 名で 14.4%、A 評価者が 657 名で 38.2%、B 評価者が 452 名で 26.3%、C 評価者が 226 名で 13.2%、D 評価者が 132 名で 7.7%、E 評価者が 4 名で 0.2% であった。単位未取得者は 1 割を下回り、S や A の高評価を得た者は全体の半数を超えた。

(2) 「追大 日本語表現力検定」による談話標識 (Discourse Marker) の定着率の調査結果

先述のように、「日本語表現」では、談話標識 (Discourse Marker) に沿って、30 分以内に 700 字から 900 字程度の、論理的な連意の文章が書けることを一つの到達目標に設定した。この目標を達成するために、履修生は計 8 回の論作文課題に挑み、担当教員から徹底的な添削指導を受けた。このトレーニング (=「書く筋トレ」) の成果を履修生に実感させるために、「追大 日本語表現力検定」と名付けて、「高等学校の制服を廃止すべき、という意見に賛成か、反対か」というテーマで、初回にプレテスト、12 回目にポストテストを実施した。つぎの表 6 に、「日本語表現」全 68 クラスについて、プレテストからポストテストへの到達級の推移を示す。

表 6 「追大日本語表現力検定」による談話標識 (Discourse Marker) の定着率の調査結果

科目名	曜日	時限	プレテスト				ポストテスト			
			初級未満	初級	中級	上級	初級未満	初級	中級	上級
日本語表現 A 〈経済学部 1 年〉	月	1	22	8	0	0	0	30	0	0
日本語表現 B 〈経済学部 1 年〉	月	1	18	12	0	0	0	3	14	11
日本語表現 C 〈経済学部 1 年〉	月	1	22	7	0	0	10	15	3	0
日本語表現 D 〈経済学部 1 年〉	月	1	12	17	1	0	5	15	8	0

日本語表現 E〈経済学部 1 年〉	月	1	20	8	0	0	0	26	2	0
日本語表現 F〈経済学部 1 年〉	月	1	24	6	0	0	5	19	5	0
日本語表現 G〈経済学部 1 年〉	月	1	27	3	0	0	5	20	5	0
日本語表現 H〈経済学部 1 年〉	月	2	26	3	0	0	0	26	0	0
日本語表現 I〈経済学部 1 年〉	月	2	23	7	1	0	8	20	2	0
日本語表現 J〈経済学部 1 年〉	月	2	12	16	1	0	7	10	10	0
日本語表現 K〈経済学部 1 年〉	月	2	23	6	0	0	2	21	1	0
日本語表現 L〈経済学部 1 年〉	月	2	22	7	0	0	1	11	16	0
日本語表現 M〈経済学部 1 年〉	月	2	26	3	0	0	6	17	5	0
日本語表現 N〈経済学部 1 年〉	月	2	19	9	0	0	0	16	11	0
日本語表現 A〈社会学部 1 年〉	月	3	16	8	4	0	6	10	12	0
日本語表現 B〈社会学部 1 年〉	月	3	19	8	0	0	7	19	2	0
日本語表現 C〈社会学部 1 年〉	月	3	10	18	0	0	3	12	13	0
日本語表現 D〈社会学部 1 年〉	月	3	14	12	0	0	0	25	2	0
日本語表現 E〈社会学部 1 年〉	月	3	24	3	0	0	2	13	12	0
日本語表現 F〈社会学部 1 年〉	月	3	20	5	0	0	4	18	5	0
日本語表現 G〈社会学部 1 年〉	月	3	12	14	0	0	3	10	14	0
日本語表現 B〈心理学部 1 年〉	月	4	18	7	3	0	2	14	12	0
日本語表現 C〈心理学部 1 年〉	月	4	25	3	0	0	0	20	8	0
日本語表現 D〈心理学部 1 年〉	月	4	14	13	2	0	4	4	21	0
日本語表現 E〈心理学部 1 年〉	月	4	15	10	1	0	2	22	4	0
日本語表現 F〈心理学部 1 年〉	月	4	24	5	0	0	1	11	15	0
日本語表現 G〈心理学部 1 年〉	月	4	24	4	1	0	5	17	7	0
日本語表現 H〈心理学部 1 年〉	月	4	15	12	0	0	1	14	12	0
日本語表現 A〈地域創造 1 年〉	火	1	20	8	1	0	4	3	23	0
日本語表現 B〈地域創造 1 年〉	火	1	22	5	1	0	0	28	1	0
日本語表現 C〈地域創造 1 年〉	火	1	13	14	2	0	2	12	15	0
日本語表現 D〈地域創造 1 年〉	火	1	20	7	1	0	6	13	9	0
日本語表現 E〈地域創造 1 年〉	火	1	16	13	0	0	0	17	11	0
日本語表現 F〈地域創造 1 年〉	火	1	11	18	0	0	3	11	15	0
日本語表現 G〈地域創造 1 年〉	火	1	18	11	0	0	2	21	5	0
日本語表現 H〈地域創造 1 年〉	火	1	21	8	0	0	5	14	10	0
日本語表現 A〈経営学部 1 年〉	火	2	27	3	0	0	1	3	25	0
日本語表現 B〈経営学部 1 年〉	火	2	26	4	0	0	0	29	1	0
日本語表現 C〈経営学部 1 年〉	火	2	20	9	1	0	6	17	7	0
日本語表現 D〈経営学部 1 年〉	火	2	17	11	2	0	4	12	14	0
日本語表現 E〈経営学部 1 年〉	火	2	25	4	0	0	7	21	1	0
日本語表現 F〈経営学部 1 年〉	火	2	10	17	2	0	3	13	14	0
日本語表現 G〈経営学部 1 年〉	火	2	22	7	0	0	3	24	2	0
日本語表現 H〈経営学部 1 年〉	火	2	28	1	0	0	1	24	4	0
日本語表現 I〈経営学部 1 年〉	火	3	16	13	1	0	1	21	7	0

日本語表現 J〈経営学部 1 年〉	火	3	27	3	0	0	0	15	14	0
日本語表現 K〈経営学部 1 年〉	火	3	17	12	1	0	2	16	9	0
日本語表現 L〈経営学部 1 年〉	火	3	22	6	0	0	9	17	2	0
日本語表現 M〈経営学部 1 年〉	火	3	13	14	1	0	3	16	7	0
日本語表現 N〈経営学部 1 年〉	火	3	21	9	0	0	3	22	5	0
日本語表現 O〈経営学部 1 年〉	火	3	24	4	0	0	2	23	4	0
日本語表現 P〈経営学部 1 年〉	火	3	24	6	0	0	9	11	10	0
日本語表現 H〈社会学部 1 年〉	木	2	18	12	0	0	1	24	3	0
日本語表現 I〈社会学部 1 年〉	木	2	14	11	0	0	0	2	15	8
日本語表現 J〈社会学部 1 年〉	木	2	13	12	2	0	0	15	12	0
日本語表現 K〈社会学部 1 年〉	木	2	25	1	0	0	3	17	6	0
日本語表現 L〈社会学部 1 年〉	木	2	23	4	0	0	3	20	3	0
日本語表現 A (国際日本 1 年)	木	3	22	10	0	0	0	12	20	0
日本語表現 B (国際日本 1 年)	木	3	26	6	0	0	1	28	3	0
日本語表現 C (国際日本 1 年)	木	3	15	16	1	0	1	9	20	0
日本語表現 D (国際日本 1 年)	木	3	17	13	2	0	0	15	17	0
日本語表現 E (国際日本 1 年)	木	3	30	1	0	0	6	21	3	0
日本語表現 F (国際日本 1 年)	木	3	26	5	0	0	2	17	12	0
日本語表現 A (国際教養 1 年)	木	4	12	16	1	0	1	16	10	0
日本語表現 B (国際教養 1 年)	木	4	19	10	0	0	2	21	5	0
日本語表現 C (国際教養 1 年)	木	4	27	1	0	0	8	15	5	0
日本語表現 D (国際教養 1 年)	木	4	20	9	0	0	0	18	11	0
日本語表現 E (国際教養 1 年)	木	4	24	5	0	0	2	20	5	0

以上、「追大 日本語表現力検定」による談話標識 (Discourse Marker) の定着率の調査結果を見ると、初回授業のプレテスト段階では、「初級未満」と評価された初年次生が 1357 名もいたのに対して、第 12 回目授業のポストテストでは 195 人まで激減していることがわかる。反対に、それなりに論理的な構成をもった論作文が書ける学生がプレテストでは 573 名だったが、8 回の論作文課題のトレーニングを経て 1131 名まで倍増している。さらに、中級段階に達した履修生、すなわち、「引用の提示」の談話標識 (・・・によると、・・・ということだ) を用いて他人の書いた文章を根拠として引用できる学生、また、想定される反対意見や一般論に目配りして、それを乗り越えていく談話標識 (確かに……。しかし、……。) を使いこなせる学生が、プレからポストと推移する中で、33 名から 586 名に 17 倍強に増加している。

先に述べたように、この「追大 日本語表現力検定」では、初回のプレテストと 12 回目のポストテストで、同じ「高等学校の制服を廃止すべき、という意見に賛成か、反対か」というテーマで論作文を書いている。ポストテストはプレテストよりうまく書けて当たり前だ。したがって、この「追大 日本語表現力検定」は初年次生の「書く力」の伸長を裏付けるために実施しているというよりも、むしろ履修生に「書く筋トレ」の学習成果を実感させるためには実施している面が強い。履修生は、談話標識にそって型どおりの作文を書きながら、10 週間前の拙い自分に否応なく対面す

る。「日本語表現」の授業を履修する前は、30分という制限時間の中で、多くの学生が原稿用紙のマスを埋めることすらできなかった。埋められても支離滅裂な内容が目立った。それが12回目にはほとんどの学生が、談話標識（Discourse Marker）に沿って、曲がりなりにも700字から900字程度の、論理的な体裁の文章を作成することができている。これは学生にとって大きな励みであり、自信につながるだろう。

(3) グーグルフォームを活用した期末アンケートの結果

「日本語表現」では、アカデミック・ライティングの土台となる基本的な文章作法の習得を目指す。したがって、他大学の日本語リテラシー関連の授業でしばしば取り上げられる「レポート・論文の書き方」等は扱わない。「序論・本論・結論」に代表されるアカデミック・ライティングは、秋学期からの基盤教育科目「知の探究」³で扱うことになっている。

先にも述べたように、多くの初年次生は高校までに論理的で筋道だった文章を書く訓練をほとんど経てきていない。そこで、第2回目の授業から、表7のような学習項目を立てて、初等中等段階で身につけているべき基本的な知識・スキルを確認するところから始めた。

表7 『日本語表現』の学習項目

	学習項目
第2回	待遇表現、公的なメールの書き方
第3回	談話標識（ディスコース・マーカー）
第4回	誤字・脱字・変換ミス、改行、読点、文体、機能語・内容語など
第5回	「係り」と「受け」の不对応
第6回	羅列の不整合
第7回	ノートの取り方
第8回	敷衍する力 その1 説得
第9回	敷衍する力 その2 説明
第10回	「事実文」と「意見文」を書き分けよう
第11回	事実と根拠～引用の方法

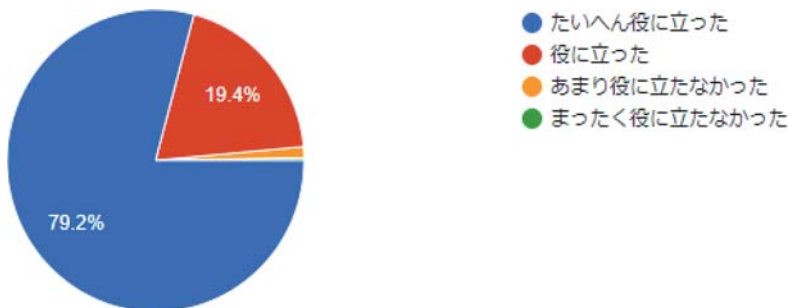
3 知の探究・・・秋学期に初年次生に履修が推奨される追手門学院大学の基盤教育科目（選択科目・2単位）。与えられたテーマを巡って、3つの異なるディシプリンからアプローチすることで、ひとつのテーマに対して複数の仕方での問いを立て、議論を構築し、結論を導くことが可能であることを示す、いわゆる問題解決型の授業。3名の教員がそれぞれ4回ずつ授業を担当し、講義によって各々の仕方での問題にアプローチする事例を学生に示す。学生は、その事例について個人ないしグループで考察し、最終的にはA4で1枚程度のエッセイにまとめることを要求される。学生は計3回の論述をこなすことで、春学期の日本語表現での学習を一步深めて、アカデミック・ライティングの訓練を積むことになる。また、半期の授業で3つの異なるディシプリンに触れることで、教養の幅を広げ、L&S科目の選択に当たっての手掛かりを得るようになる。13回目は、3名の担当教員および学生との公開ディスカッションが予定されている。

以下に示すのは、それぞれの学習項目に対する全履修生の「評価」である。アンケートはグーグルフォームを活用して 2021 年度学期末に実施された。

① 第 2 回目の授業で、高校までに学習した「敬語」の復習をしました。日本語表現で学びなおして、どうでしたか？



② 第 2 回目の授業で、高校までに学習した「公的な手紙（メール）の書き方」について復習して、授業後「本日の授業で考えたこと、気づいたこと」について先生にメールを書き続けました。このトレーニングはどうでしたか？



③ 第 3 回目の授業で「ディスコース・マーカー」について学習して、8 回の課題作文を書きました。このトレーニングはどうでしたか？



④ 第4回目の授業で、高校までに学習した「誤字・脱字・変換ミス、改行、読点、文体、機能語・内容語等」について復習しました。日本語表現の授業で学びなおしてどうでしたか。



⑤ 第5回目の授業で、高校までに学習した「『係り』と『受け』の不对応」について復習しました。日本語表現の授業で学びなおしてどうでしたか。



⑥ 第6回目の授業で、高校までに学習した「羅列の不整合」について復習しました。日本語表現の授業で学びなおしてどうでしたか。



⑦ 第7回目の授業で、高校までに学習した「ノートをとる技術」について復習しました。日本語表現の授業で学びなおしてどうでしたか。



⑧ 第8回目の授業で、「パラグラフ・ライティング」について復習しました。あなたは「パラグラフ・ライティング」を学んで、どう思いましたか。



⑨ 第8回目と第9回目の授業で「敷衍する力～説得・説明」について学習しました。あなたは「敷衍する力～説得・説明」を学んで、どう思いましたか。



⑩ 第10回目の授業で、高校までに学習した「事実文と意見文の違い」について復習しました。日本語表現の授業で学びなおしてどうでしたか。



⑪ 第11回目の授業で「根拠の引用～直接引用と間接引用」について学習しました。あなたは「根拠の引用～直接引用と間接引用」を学んで、どう思いましたか。



⑫ 第13回目の授業で「ビブリオバトル」を実施しました。あなたはビブリオバトルを体験してどう思いましたか



以上がグーグルフォームを活用して2021年度学期末に実施された学習項目に対する全履修生の「評価」である。12の設問は、2つのタイプからなる。1つは、初等中等段階までの既習事項（①敬語、②公的な手紙（メール）の書き方、④誤字・脱字・変換ミス、改行、読点、文体、機能語・内容語等、⑤『係り』と『受け』の不对応、⑥羅列の不整合、⑦ノートをとる技術、⑩事実文と意見文の違い）について、「日本語表現の授業で学びなおしてどうだったか」と問う設問そして、も

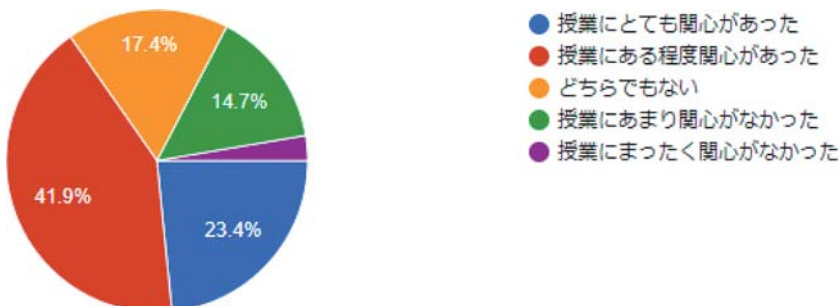
う 1 つは、中学や高校では一般的に取り扱われない学習項目（③ディスコース・マーカー、⑧パラグラフ・ライティング、⑨敷衍する力～説得・説明、⑪根拠の引用～直接引用と間接引用、⑫ビブリオバトル）について、「新たに学んで（体験して）どう思ったか」を問う設問である。

前者の高校までの既習事項については、9 割強の履修生が「学びなおしてたいへんよかった」もしくは「学びなおしてよかった」という肯定的な回答を寄せている。「学びなおす必要を感じない」と答えた学生はごく少人数に留まる。ただし、7 回目の「ノートをとる技術」については、「学びなおす必要をあまり感じなかった」と答えた学生が 10.3% で、唯一、肯定的な評価が 90% を割り込んでいる。これは、高校までのノート・テイキングの訓練に加えて、先述の「新入生演習」の後継科目の中で「講義を聴きながらメモを取る」トレーニングが課されている場合が多いことに起因すると考えられる。このことは、「新入生演習」の後継科目の担当教員との 7 回の懇談の中でもしばしば話題になり、「日本語表現」の授業の中で屋上屋を架す必要はないのではないか、という結論に至った。

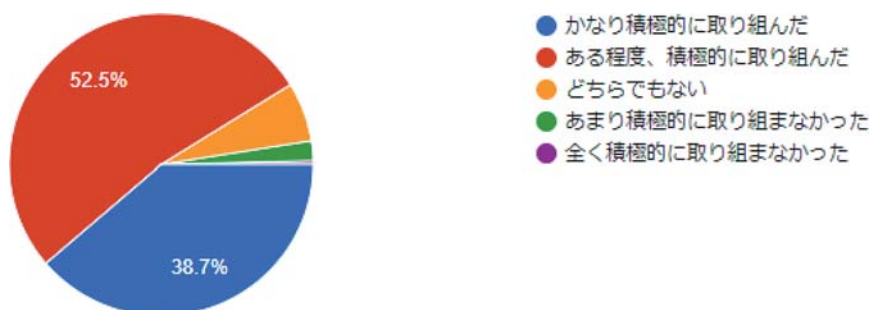
後者の高校までの未習事項についても、すべての設問において「勉強したことがあるがこの授業で学びなおしてよかった」もしくは「勉強したことがなかったなのでこの授業で学べてよかった」と回答するものが 9 割を超えている。ただ一つ、第 13 回目の授業で実施した「ビブリオバトル」には「体験したことはなかったが、この授業で体験する必要を感じなかった」と回答した履修生が 8.2% であった。本稿では「書く」トレーニングを標榜した「日本語表現」の成果と課題に焦点を当てているので、番外編として行われた「ビブリオバトル」については稿を改めて詳述する予定だが、8.2% の否定的な回答は、自撮り動画で愛読書を紹介するという実験的な試みに困難や抵抗を感じた学生が多かったからではないか、と考えている。

さて、このグーグルフォームを使ったアンケートは、計 12 回の学習項目の必要・不必要を問う設問のほかに、「日本語表現」の授業を通じて、「取り組み姿勢」や「書く力」がどのように変化したかを問う設問も 5 問、用意されていた。その結果を下に記す。「授業に対する意識」については、受講以前には関心度のばらつきが目立ったが、「積極的に取り組んだ」結果、期末には「受講してとてもよかった」もしくは「受講してよかった」と回答した学生が 95.4%、「書く力が身についた」という成長実感を得ている学生が 98% に達した。

⑬ 「日本語表現」の授業を受講するまえの「授業に対する意識」について教えてください。



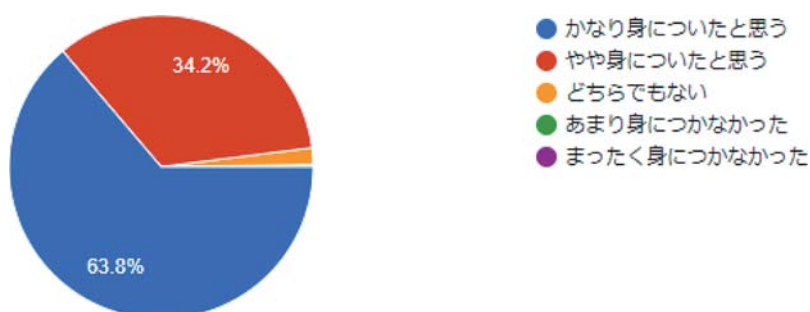
⑭ 「日本語表現」の授業に対する取り組みの姿勢について教えてください。



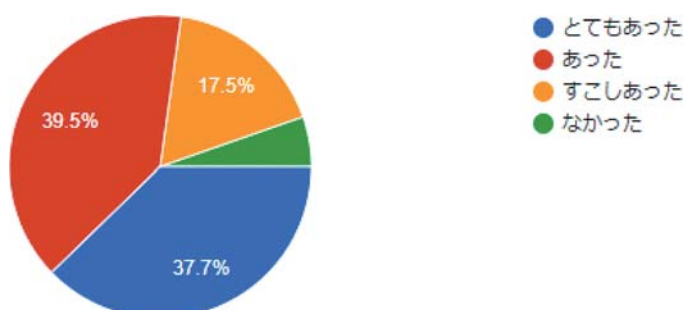
⑮ 「日本語表現」の授業を受講した後の「授業に対する意識」の変化について教えてください。



⑯ 「日本語表現」の授業の受講をとおして、「書く力」が身についたと思いますか。

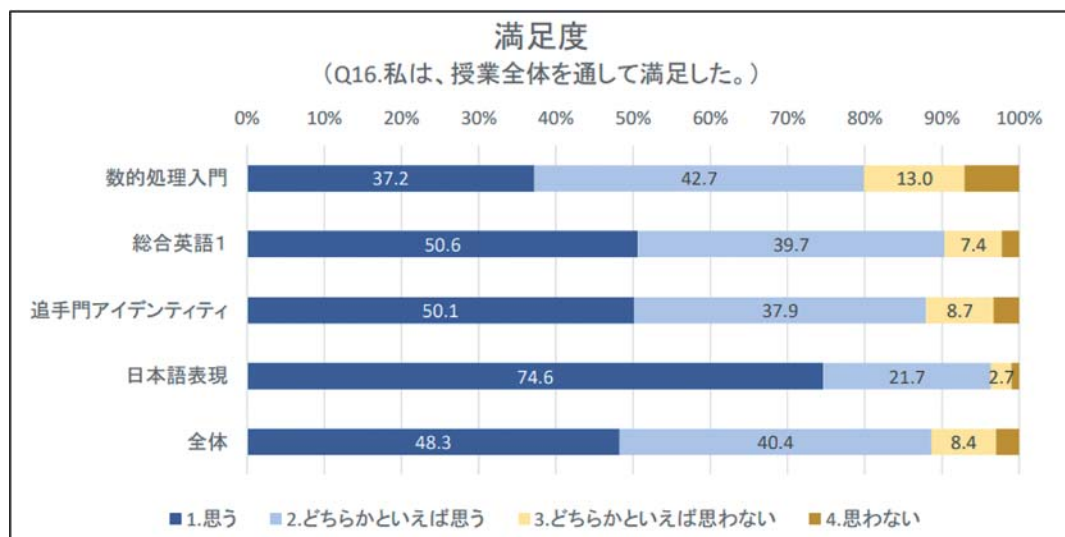
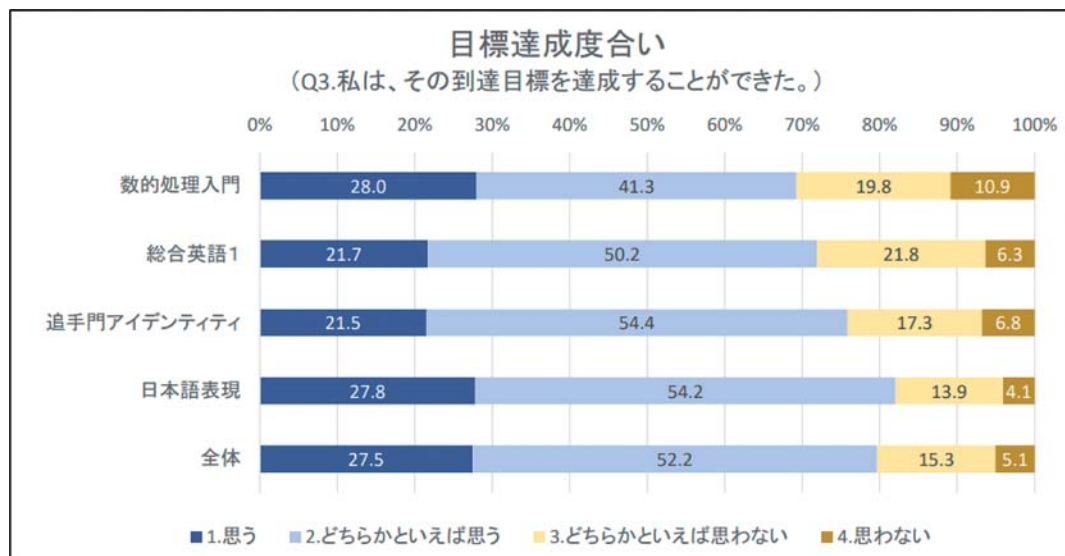


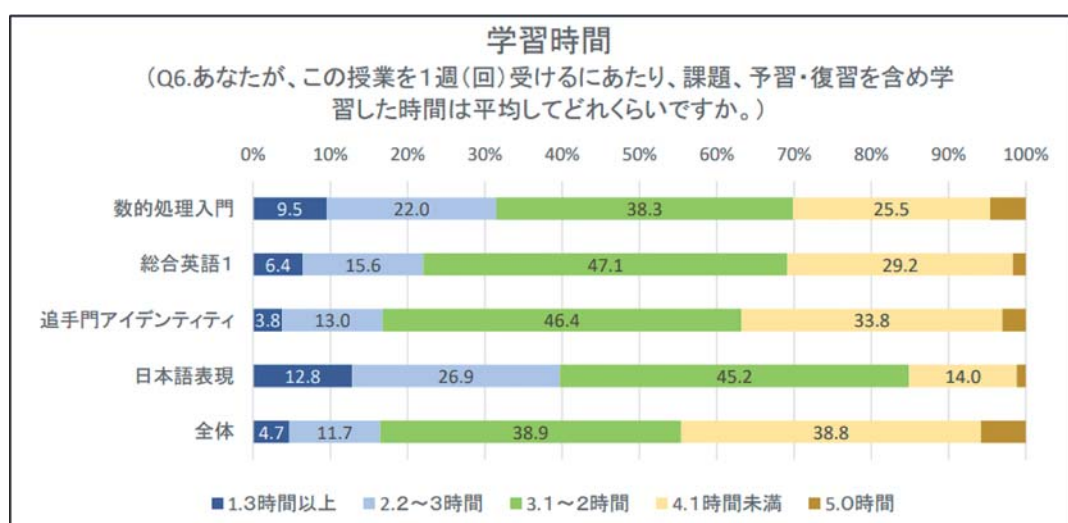
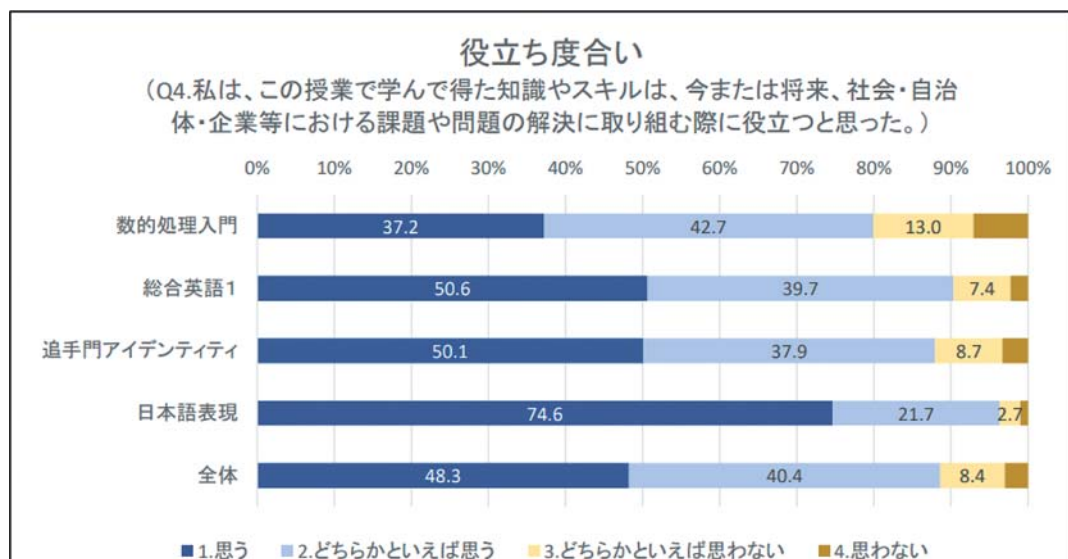
⑰ 日常生活の中で見たり聞いたりする日本語の表現に対して、意識の変化がありましたか。



このように履修生は、かなりスパルタな「日本語表現」の13回の授業を通じて、自らの「書く力」の伸長を実感し、学び続ける意欲が掻き立てられ、大きな満足感を得たといえることができる。このことは、次に掲げる春学期の「全学授業アンケート」の結果からも見て取れる。

(4) 全学授業アンケートの結果





6. おわりに～残された課題

以上、2021年度の基盤教育科目のカリキュラム改編に伴い、春学期の全員履修科目となった「日本語表現」のコース概要、全員履修化の背景、授業の基本方針と進め方を説明し、前節では「日本語表現」の具体的な成果を、定量的な調査結果として報告した。総じて2021年度春学期の「日本語表現」は、所期の目標をほぼ達成し、新入生の「書く力」の向上に寄与し、高い満足感をもたらしたといえるだろう。

しかし、課題も多く残されている。それは、履修生の側、教員の側、双方に指摘できる。

(1) 添削された論作文を読み直し、書き直すプロセスが一切なかったために、身に付かないまま書

- きっぱなしになった学習項目があったのではないか。
- (2) 小テストを授業の冒頭で行うことは、学生の遅刻防止に一定の効果があつた。また、事前動画をしっかりと視聴しないと小テストで正解が導けないようにすることで、反転学習を後押しした。一方で、小テストの内容が事前動画と関連があるのなら、事前課題の答え合わせを行ってから実施するべきだ、という考え方も成り立たないか。
 - (3) アウトラインのワークシートでは、「理由は3つある、まず、つぎに、さいごに」が一つにまとまってしまっている。したがって、学生は、3つの理由を一つのパラグラフにまとめて書いてくることになる。しかし、本来は、3つの理由はそれぞれ一つのパラグラフであるべきではないか。
 - (4) 日本語表現のミニマム・スタンダードとして、談話標識 (Discourse Marker) の初級をクリアすることが求められている。そして、初級をクリアしたら 20 点 (満点) が付与される。しかし、実際は中級段階の DM である「たしかに・・・、しかし・・・」や「～によれば・・・ということだ」や「要するに・・・」も授業で導入され、作文も書いているのに、それらをポストテストで使っても 20 点に加算はされない、というのは学習成果を正確に反映していない評価ではないか。
 - (5) 8 回にわたる論作文課題の添削が教員にとってたいへんな負担である。「書く」筋トレというスローガンを掲げているからには、学生にたくさん書かせなければならないが、今少し、教員のライフ・ワーク・バランスに配慮したプログラムにならないか。
 - (6) 同じ学部学科の学生だけからなるクラス編成なので、価値観や嗜好が同質となり、ピア・ラーニングに広がりや深まりがもたらされない。
 - (7) プレポストは縦書き、お詫びと依頼の手紙は横書き、論作文の多くは縦書き、ノートの取り方は横書きという調子で統一がない。そもそも原稿用紙に執筆させる必要があるのだろうか。
 - (8) 直接引用、間接引用、注、参考文献は、11 回目の「基本的な文章作法 その 7 事実と根拠」の中で、初めて本格的に触れられるが、履修生の中には「もっと早く知っておきたかった」という意見がある。一方で、引用の方法を早めに導入すると、学生の中には安易な引用を原稿用紙の埋め草に使用しようとする傾向が否めない。
 - (9) 11 回目の「基本的な文章作法 その 7 事実と根拠」の中の引用の説明のスライドは、阪南大学の教材からの借用が多く、追手門オリジナルではないので、書き換えるべきだ。また、引用の形式に関する内容は、いささか汎用性の低いものといわざるを得ない。
 - (10) 日本語表現の 4 階の教室に 32 人の履修生が入った場合、左右両端の最前列の机に座った学生はスライドが全く見えない。

以上のような課題が考えられる。

また、秋学期になり、「日本語表現」の後継科目である「知の探究」の中で浮かび上がってきた課題がある。それは「書く」筋トレと銘打ち、スパルタ教育を標榜したはずの「日本語表現」が、

一部の学生には「楽勝科目」と映っていたという驚くべき事実である。その所以は、一部のクラスではディスコース・マーカーに沿って、とにかく原稿用紙のマス目が埋めてあれば単位が取れた、ということらしい。真偽のほどは現在、確認中であるが、もし事実であれば由々しき問題である。

また、たとえ「楽勝科目」という言説が誇張であったとしても、談話標式 (Discourse Marker) のような形式的な枠組みは、ともすれば「フォーマットを埋めさえすれば点がとれる」という安易な発想を招きかねない。談話標式 (Discourse Marker) を使った指導は、論理的な文章を書き慣れていない新入生にとって極めて有効な方法である一方で、使い方を誤ると、思考し表現する意欲そのものを削いでしまう弊害もある。肝に銘じておかなければならないだろう。